

日本弁理士会東海支部

小西 富雅 支部長

二〇周年を迎えた日本弁理士会東海支部、時代の交差点とともに、弁理士の役割も変わってくる。知財のスペシャリストが今何をすべきかを、次の一〇年を見据えた小西富雅支部長に話を聞いた。

（聞き手／中部財界フォーラム社塚本隆代表取締役）

小西 富雅

1982年、名古屋大学工学部応用化学合成化学科卒業。87年、弁理士登録。96年、小西国際特許事務所設立。2001年、小西・中村特許事務所に改名。16年、日本弁理士会東海支部長就任。



——弁理士数の急増、国内特許出願数の減少、それに加え国際化・TPPなど厳しい状況です。

弁理士の人数増加については、規制緩和によることはもとより、米国に対して数が極端に少なかった日本の現状を是正する意味で、当を得た政策と考えています。

しかし、予想外だったのは日本の特許出願数が減ってしまったことです。昔は、電機メーカーに勢いがありました。ソニー、シャープなど軒並み弱くなってしまい、出願数が激減しました。それが、あまりに急激だったので弁理士の数と出願の数とのアンバランスを産んでしまったのではないのでしょうか。このまま手をこまねいていけば、我々も時代の波に飲み込まれてしまいますので、いまこそが知恵の出どころです。

弁理士の業界について、他国はどうなのかといいますと、どこも安穩としているところはありませぬ。シンガポールなどは、国家を挙げて東南アジアにおける知財の中心になろうとしています。国境を越えて知財を取扱い、そのハブ

になろうとするものです。「そんなこと本当にできるの？ 私たちではできないの？」、という見方で昨年東海支部から若い先生方を使節団として派遣しました。今後の弁理士のあり方を考えるよいチャンスになったと思います。

出願数と弁理士数のアンバランスに伴い、会員事務所の収益の悪化は避けられないところです。この現状を悲観しているだけではラチがあきません。翻って考えれば、我々の業界は儲からないので、外資の脅威にさらされるリスクが小さくなります。TPPの世の中で、儲かるとわかれば、外国の大きな事務所がブランチを出して、体力にものを言わせて格安のサービスをされては小規模な日本の事務所はひとたまりもありません。他方、手前ミソではなく、勤勉で真面目な日本の弁理士の実力は、他の国の弁理士に何ら引けを取らないばかりか、バブルの頃から今までに各国へ出願した経験を比べれば、グローバルプレーヤーとして最強です。したがって、現在はシンドイシンドイといい